

Kodak

LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Centimetres

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White

Yellow

Red

Magenta

White



95

90

85

80

76
1551
2

吉原大鑑初編卷之下

東都

豊恭子撰集

太夫

薄雲の傳

新序二丁目

三浦やまときの内

萬葉の元禄の頃も先づいたるに於て容れゆく
筆へもすりゆく青利のとくあ行のこよびてまつりわざ
餘情のとむそこそて情のとむりとえ方より或時八月
十日夜揚の二際まで日暮とてそぞらその夜へ一天み
書よ一月先照つがゆえ実よ二年未だ行き二千里
外故人へと古跡をまことなきとある所行をさづく

あらかじめ角をまわる者も、
さういふことをあくとおひでりの男どもをもと廁の
柱なども、一見まぎれぬうちに、壇のまなかに猪の首へ金輪て
わづきの廁のまなかに猪の首へ金輪て
あらかじめ角をまわる者も、
とあれど、猪の亡靈を書懸正事せざる
系町の猪がまわるうち、猪の亡靈を書懸正事せざる
といふやるものありて、故人曰く、猪の猪の場の場や町より
うるさいのたゞよそのふるふる群と云

大鷦の傳

あめた風か吹きやうれども全霧ゆくと山形のあらわし
さと まつりのからみうらあどむ是よひにいざなむと
わびま 月と
天の通とこうづひゆふかくまよひとてうるさく
そぞく ね
むせはくへきま痛のせうの肉あひのゆの、うつ幕ありと
くち あ
かくよひかくへくおえみとてうるさく
らうき す
人へくわざうしゆうれんふねのとくとくあうあ病のとくと
もく す
ちくはうへくとくあうとくとくあうとくとくあうとくとく
もく す
あゆまくはうがゆまゆせなとくとくとくとくとく

と
とくの事の如きが加勢お尋ね
あつさう
ともかく書あらわ終ひむかはる病め也
かほ

見てたまうがゆくあ、坊主のあくちあわせへまきと
さざめた風かよ、ひだりとせ一男ゆゑゆよおもむきを
きゆ、あすこはもやまの身のうとくわざたを
はなとおどるあらそい全とその男の方(おう
きゅう)の傳ゆたかくふきくの全とひやく界
きわみのあらそいおぞめ害毛比一鳥姓みゆく鳥

元和四年
二月廿日
代同
卷之三

卷之三

ちのむすめは、白井桂子が、主に「花火」の題材で、
舞の女たちを描いた、豊かな色彩の絵画です。
また、この絵画は、桂子の代表作として、多くの
美術館やコレクターに所蔵されています。
桂子の絵画は、その鮮やかな色彩と、女性たちの
優美な舞姿が、とても印象的です。
また、この絵画は、桂子の絵画の中でも、特に
注目されるべき作品です。
桂子の絵画は、その鮮やかな色彩と、女性たちの
優美な舞姿が、とても印象的です。
また、この絵画は、桂子の絵画の中でも、特に
注目されるべき作品です。

とそれをもつてとせかへるまちの神とひのすてば
その神のかくむかくめのくまかのりせひ
あんとへばそふれなたまうがのこわらり。
えまことひの書ひはくまをものかきみよト
あじくまみ稀といふを尋ねておひだれるよ

八重袖

鯉のせよかへはくのゑよおてアヒトキチムマム
あゆのやのまし墨のせよちみのねねちみとのと
きくにゆるの飛うだりのきやくわくわく

えさすのひ

こまくハキ袖とさうりて廓半^{カミナ}やてへへ黙ひとさそ
白井挂ハとづかひと中玉筋の竹簾のあ半^{カミナ}やて廓^{カミ}
の子息をうり一ヶりのゆめとくせうちふとうのき
白戸幕^{カミ}とぞうえより初^{カミ}よりありまじで懐^{カミ}心院をま
とりよ男伴^{カミ}をまろ新^{カミ}と國をむすびよ^{カミ}くとうり
ゆう日^{カミ}唐衣^{カミ}をまろまよほまそ持^{カミ}ハとつまざうちれを
ああへえ物^{カミ}よよりけふみ仲の町のゆきのひあや
くのちをああうえのそめゆ^{カミ}がゆと町危^{カミ}のあや

移轉ゆくやうの是役の付す拵打と先よお歌を
秀とつと名姓よも病の傘代きうけゆる差しも是と
ち後一族の名姓ある仲の町へまりたるを年
よつある和締ゆべきの小室と姓ハあくニそあなり又
小室より白井のまふ年より賛よひて移くせ一初もうち
年ふ胸とうちこゝでひの体とわづめニ世かニ世もあ
先りやどりぬゆうと活びの井へ移きて夜とくふ
風ひう白井ハ浪人の才あり彼女の令子ひつまくふひ
移ゆくちよ八十左まちまへ中々圃羊糞金取森西

モ人せ切敷一奪ひえする全めて日麻もよとくとも
ゆよまけぬ身の奔りその後無名の恨みて移るを
敷一全こくまうをひきりその場をみげむううど天
の網よからて終よ終が束のあとまくまのそむ候
と懐内をまぢり納め月のちく萎のるまきは
篠の二せとちきう一姓ハよこされとなりわなまふ親
いと縁ようのぬさまのそめ夜小室のそこある高とゆけ
そぞ同名の姓ハと姓アレくちくづ称あり姓ちみ跡
一姓ハとひそむらひトまくすれとのべ思ひとよ

奇一つと番煎とて金十あさりそのう合ひま石碑
料とてかきあそきとう様八の墓のまくをまつふを漢
通へるかう自害してお墨入りはちば門和尚の仕
うみどりを活塗のあら紙まつあゆまつ生ひをち
てありあらわゆまつてすまをまえ方あせけ
陽陸ゆめ黒がねをもくあくせ因をてあくよまくふ
黒のむ体あ代のもくのくも白安の極まく底ト
所のゆのめ不役よかひ様八が墳と一石よ葬まくつ
くるよの一石底くまびるへてまく連ねの掲セ

植青石ゆく 世終後と丸よ井の宇のニ紋谷と
あくこと冀翼協と
あくこと冀翼協と
れのせよ寛があと。然りよと因もくあせ
むくと

これあせの今よりてまをほにまく擇かんじてかう
薰の傳 京や某日
あかざるとよをまの巴の一枚看板みくら
を邊ようかへく膳とひきとひえ人を教
そむり廊へりこむ人をよけ居とぞてとくわ



テの李夫人 酒飲んでおもむくまことにあら
キトとぞ 僕とておもむく日別湯の客乗つておひ
流れせしらんこうとりよ全奥と四ツ又 石畠のへる
みかかをあやーおせありうる伏見をあわせぞう先
着やの娘よひするまで全奥よかうそ客の方どうし
ろみあー相手の大酒のがゆかまつりのち一客も
ゆまりきりみてまうらまのものわとう迎うるに
まじめまよりひつけ全奥とあざぐく。蓋の上へあら
べるあみあみとみゆひ落とせぬ全奥とあせあく

おみせーと回びまきあまくわまくひがりし
おーおみれでスベハキ体ませ侍るとの接觸みあむ
おみせーさまよちゆの接觸の利よむべー
てわどりうれむつことをすけれとこづよく別湯
代かくねくそおこう掲げ血氣るき。こうのども
萬をうり酒をすくまうんく酒もまわらておひぎ。
のれぬかあつりうくのまく麻とほく一わら者わまく
らぬのとよひづ。あい七食入の血氣一たん相撲と
落のぶわらふうとのけよだ血氣るきしてたま

か直面に戴せんとひそめどとくセ合への重くまづあ
とへきけのじこれとせひのれがとひかーそひのうす
椒の粉を塗よひゆふとたゞみせたゆりはく一毛のやう
をうへぐととと霞く因と白くと見くと爲れける
身中勤怠一と教よみ成ゆけは成ゆけゆる事や
むしんと登あはりけらか馬若きをも身中相撲よひせ
てのれ薫がくと並あらはりとつらはるゝ是故ゆ
るれすまう體よへからまどと薫成答すまう
まうひはかの考証へまうれどお仕方さりけども

正月比合よりあら書て云せむと假とお一やれ
ちゆうからまどとおれへり薫と
くみせでかみいはぬかのうべと薫のうべと
ドヤとやう

かうやうさんある君の乗組さんとひそひ是モ
氣重のよれやどぎのゆべ

九重の傳

新刊本多喜の月

丸腰よりもくかゆみのねが方より出る者みそ
れの奴と名ふらむとあまのへり身中のえどの

あんのうふをひくかへくかへにせばむる人乃
あふ

かへゆへー はまやれき とあり
かへゆへー はまやれき とあり
まきのゆへー ま人の身子 あそちの子供とた
りまわそびへ まの まの 身子よ怪をき
くみその病よりひとひきりお果一ヶ先方を
まの 悪を まの まの まの まの まの 大

岡侯のゆかゆゑを 双方へ その筋合とせん とが
ゆりけと先かとみとくちのゆきと上乳母うりと
身子まうとも解死人よ かされりゆう がひりと
大正産ひりく ひほ解ゆりて そのからみ先か
身子と身をせりとく子供 国元の能よきより
ちの粉末よすりて 幸運見つたそく乳母のゆれ
さうざるまうと その遇事よ ふう年のうちも
身とまづめよとみのゆを先にゆこの山野よ絶ゆ
終よ前事よ身のびるそれより吉永家町二丁目

雨宿やの抱へとちり落紙かまと改めり
又日このたまらむお方のひのみく不意のゆき
あわづうしくほすまへりからぬ御より終ふ吉
ゑせへ一まみれあまつよらまゆる今ハ月日と
うみをかくもん

正月の三ツ男もゆく宿り

月やゆりのやくみかくして
あむかは女へはゆみらはに従あらむにと風ふ
トヨハタキテ又月ハおきてえりゆやくされどゆ

今ハおぐまよすとあぐむとひゆうから風
雅るのうとどむりゆうあせの業のやうのう
をそぞはまくらうその後九度じゆくとまがつ
さゑつてあむをもうねーとす言事のあらう
戸戸町のえと年をうそく先年せせられ
いがまと秋奉もおまじきせし候只今御奉
りくとも外へつたてゆのあまうぎのむれをゆる
ひまぐく等とておもへやくらきを勧めのゆー^て
がくゆる娘よけりぬのりありとも曾もいゆ

つりてへまづかのけのけとじのまほり上あひ
かま新しきわゆり

隈アマキシキヒロヅミ 開田川

たえぬあぐれとりくまでも 波
と解ケラタタキモテ波夜の有氣波
奉り西わ奈して波アヒリモテ波先ゆ
てかんト恩アメー那のあらねまくされーと見
傳よるの意怒ふぞくえりありけ

紀文の傳

延喜のちの中鷦子よ支古あつといふ者なりカヒハ
いたすありしよ七月移天ありよ廢アシ自死
あすあどに天中大かこ罪をり香あふつむ
處に立大なるヲモ猪人あらざのと見せ出
まゝ別多くの移復ケリツケモそのををお直
き本草アシムアリ材木森里モクタリ此を紀文
小判へ完するより粗び色一子供よつぶーりねば安ガ
その大氣よ御簾モ材木森里モクタリ紀文山のつ
くへ猪挽うちるもく本草に立大なる材木岡や

三日山房は見事に活版を紀文が著すとて國會の
紀文人多くの利害とわれて思ひあつたことを多く
の会設け、殊々書寫のほりの處の難字を引
き出でて、活版が活版の方を下め町へゆくもの等
あるとて、三日紀文と並んで、かくのよと紀文
これより紀文もや文もととすまへて、ふ代の教十人
つらうは教元のゆうがなむを是ゆくあべー紀文
元一人の母よ、船底へさせ一ヶ月三百丈のうち、船の二
人焉せば、廣くみ今、日暮のみ仕合せよとまづ

わ行ゆて地面に置き、と伊川一毛町ゆて、彦子を
とあり母と、屋店をせその盛あらうの、初日の出る
ぢくちりあらふ元祐五年、簷をちひ建つての
せの積栗とあり、やびへーく復り四か月の役人
元へ出仕とく、雇形をかみて、英一様、中村吉三清
晋子あら、因船めて大河をせよ、それからと
娘よつて、とおあへて、そのひのやう、實ふれ
編ひ、底うすみ、又、さうる手の筋、かづくらす
ほの流れありて、紀文書ふるは、度量を以て、おひ

けりかにテキマミタリハシカシシトハモの様なもて
擔幕の樂よりモスアホ人形被着トツムラシ
モクレリモタニ屋敷内引キテダスヘ体験とヨリ
リエ紀文也歎ハレ向後カジケルノリヒキ
チク尾紀文にてモニ店の八角あらビキニ二千五百
キモニモヒテ五ヶ絶くヒナアシキの縁をドギマ
モの戸の名取モサ神社美惟子とソノ祖母東亭
の夫西久ありハ十二月上旬紀文例の通り左殿末
社大門の前をあはりテ大門外をもテ上中下の

女房裏表の系やみのるまであはすいヒテ
ウカドモトオサセヤヒリヒナヒギ揚や人別姓セ
リアリセ日ゆくモリナラヒラハニベニ十三首ある
モお主ヒギヤトヤセガアハニベ年正されみ今
雪太門外もテ廊中あらビアヒヌヒトはうへ
モのモ尼あくまももあらビグアヒ筋のわみ
ハケハセルシテカバクル年ノアレ キ角
さてまこと元禄十一年東叢山誌堂山野舊指
紀文塔方持ヒギヤウケムモ殿一くまうけ

信教へて食をあめへて秋田よりあみて
後もふどりあくめつと二巡り稻衣人あみ
きあみとれ百膳とも其角は兩ものかすれ小と
りふそれよりぬと極よつけえびらどわげて又く
吉魚もあむれあいびの太門がまうとせりま
或とて糸方の大森三くづまゆく紀文方へま
ち野経のり紀文もたみゆうご山海の松ね豆食を
ほく一様葉 畏どぞて湯あめの岸ふ鳥を擱よ
うそのうちみ魚のたま紀文よむひおげの歌

山中もさざれを女弟へつよひの鳥のゆゑあわへるの身
まくわさざれをるゆの身り白戸のよ房もやうり
あさごーとまくせば紀文も狗ふ隣うへぐそり作
を云せせざりづく明月のをゑ人因ふやうえんと
てその夜は紀文がからむあととひふねびゆ
る紀文ハ物のたまう一まみーとあひ四人の
あわよきのゆとからうかをりくとをへけみが四人
いきだきあむきあくづり大はや二面うち方くわれて廓
中あせまひよー茶や湯やおややまと赤の衣の

たとへあそぶをもみやまやだくものや島のやうや
八百やまもん切るこ人のたまのこまくらゆゑとゆ
あくもあくかくゆゑてのまくはくべ用のくもと
名ひ玉さ。おゆとりりくゆゑふあづく今く
夢くわざくおもつれりきが定むとすと承宿を
トあえやげふよをめりち紀文きみが宣教の相あい
小神こじんといちゆうの神かみ一ゆりび紀文きみへ二人とひ
るひ仲なかの町まちよりまきみの町まちの在あめ張ぱりくくあ御ごの
希きよ並ながく彩いろき免めんみづうまをぞせうくく

紀文きみへわづらあせや希きやの支し拂はもあ御ごのうりを
せうひ紀文きみが希きや大おほはやくわづわづうそねう揚あや尾お
拂はりくづりければ揚あや支し拂はもりぞひく波なみと
ちくうちみ町まちの女め多多くく富とくありゆゑくはくに
ふしてこのあくはりこーたらこくもおあくらね
かくはくどーとあく希きやヤケキが今日けふ紀文きみ
きのわづわづあく希きくある五ご町まちより女め多多くく一人ひとりのこれく
あるわづわづ者ひとは萬まんまきでむこうは黙だまあづらきね一ひとつ
テウゲのこきくくの黙だまの毒どくまくとほくま

うふこの人の大歎大乐せんりよ紀文の考揚され
べとく食くへかーすらぐそち勧めの事多ひすむる
事多くびとぬるやうよ後立けき一ども希やをゆ
ざまがせひのうりゆれとくちか一ヶ望みあやしけ
べと善きものてりつまこととすきし紀文さゑの冥
ゆびあてせむるが等石井一挺もこれるよとやゆく
三ノ川より後立つぞー今ハ管とあく姫よ事う
あはせとひのつけたまどもこよきと冥王のほ
やけれがこ人へ身なあひせ紀文よあけられ思ふ

僕

北郭の車ト並ミ成マツむル先ス二浦ミ乃ガ
高タカ尾テ高タカ雲クモ其アリ所ヨ名メイ思スの傳タケ代ダ
集チめム、早アリて吉ヨシ原ハラ大オ船ボウとシ此コ頃ハ
友ヨシ久ヒロ後ヲ吉ヨシ梓シキ鷦サシ鷯トリむク切カミ乞ミ

中ナカ世セ二百葉カタタガのむムつツとトはハ清キヨ先セン
まマむム作ハシ多タカ多タカ、殊シテ又アリ大オ金カネふフあ
りアリ、燈ラン火ヒ清キヨ煙スモ具ツバ有アリすス也カ、
顔マスクせゼ向カミの微タカはハ私ワタシ、否リ否リとト夷ヨリ
よヨ肯カクさサぐグ、是シテ非アリちチもモきキ代タケ那ナ

在よりよ、嗟大方の爲よりその拙
すくせ代許りぬともせずと
乞ひ申

癸巳時分序

乾隱士述

